

事故データの見方 読み方 考え方(6)高齢期の事故 なぜ、男女はかくも違うのか(1)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-01-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 信彌 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/511

事故データの見方読み方考え方

高齢期の事故

なぜ、男女はかくも違うのか①

東北学院大学教養学部教授

吉田 信彌

ジキル博士とハイド氏?

D教授は中年のだらしなさをまったく感じさせないこざっぱりとした着こなしである。自室は塵ひとつなく、本棚はいつも整然としている。講義は時間厳守、板書もきちんとしている。几帳面とはまさにこの教授のための言葉である。彼を「几帳面」と記すには、その字体も一角一角を丁寧に書いた字でないといけないような雰囲気である。

そうした評判から彼は図書館の館長に任命された。ところが、館長室の机は埃が積もったまま。資料は乱雑。館長なのに借りた図書館の本を返却しない。かの几帳面ぶりはどこ

へやら、である。

彼はいったい几帳面なのだろうか。それとも几帳面ではないのだろうか。

几帳面という点では正反対の面があるD教授である。しかし、彼の性格を自己中心的な人とみれば、どうであろうか。彼は要するに自分さえよければよいのだ。自分のものは大切にしながら、関係のないものにはぞんざいなのだ。と解釈すれば、彼の矛盾したような性格も同じひとつの源から出たものと考えられる。

右の例は、G・W・オルポートの名著『人格心理学』（誠信書房・一九六八年）に登場するエピソードである。オルポートはパーソナリティという心理学の概念を構築した高名

な米国の心理学者である。本稿の例は原典をデフォルメしたが、一見相反するような特徴も根は同じところから生じた違った側面であって、人には一貫したその人らしい特徴がある、というのがオルポートの主張である。

彼のあげた例をもうひとつ引こう。子供の例である。

小学生の彼は学校ではよい子である。お行儀はよいし、先生の言うこともよく聞き、ほかの子が嫌がる仕事も率先して行う。担任の先生はどのような家庭教育をしているのかを楽しみに家庭訪問したところ、母から聞く家庭での行状に驚いてしまった。

その子は家ではわるい子だった。

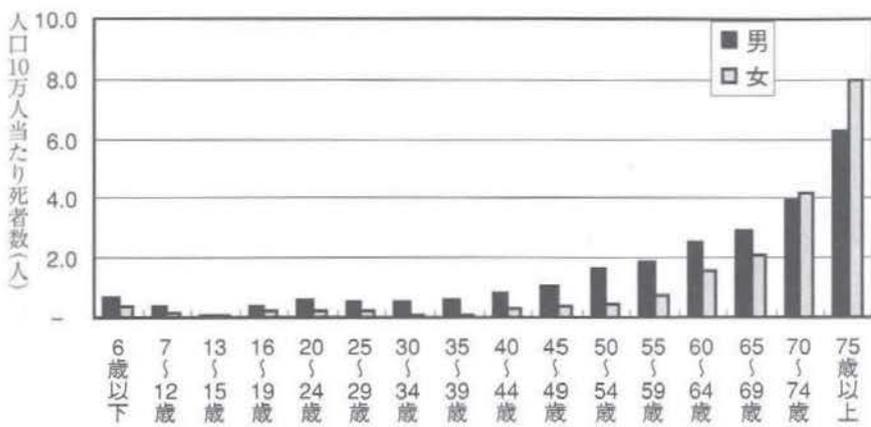


図1. 人口10万人当たりの歩行中死者の発生率(平成18年)
 【交通統計 平成18年版】交通事故総合分析センター(ITARDA)

年をとると
 女房のほうが
 危ないのか?



イラスト・ふじたとしお

母親への口答えは日常茶飯事。手伝いはせず、弟と妹の面倒をみないどころか、泣かせてしまい、ますます母親を困らせる。

学校での優等生ぶりを聞いた母親が驚き、担任と二人で考え込んでしまふ。いったいこの子はよい子なのだろうか、わるい子なのだろうか。

行儀のよしあしでは矛盾したような子どもだが、要するに大人の注意を惹きたい子供だと考えると、単純な動機がくい違う二つの顔を説明する。行儀のわるい子が多い学校では優等生であることが教師の目に留まる。家では弟妹よりも自分に注目してもらおうには反抗をしたほうが効果的である。大人の間で育つ第一子にありがちな心性とみれば、その子はふつうの子なのかもしれない。

矛盾したデータの縁組み

現象をみていくと、ある規則性が

みえることがある。さらにみていくと、それと矛盾するような側面を見出すことがある。そこで、都合のわるい面を切り捨てたり、法則性の発見を簡単にあきらめたりしてはいけないのだから。矛盾した情報こそ新たな法則発見のきっかけになる。

私は前に「データを縁組みさせよう」(六月号)と呼びかけた。関連あるデータにつながりをもたせることを勧めたのだが、今回はさらに進めて、ばらばらにみえるデータも、深いところまでつながることがあることを訴えたい。仇と縁組みしてこそ発展がある、という戦国大名のようだが、人間の行動を広く深いところで、関連づけて、統合して理解する精神をもとう。

交通事故の統計は、老壮青と年齢を区切ると明瞭な傾向がでる。しかし、その規則性に満足するのではなく、さらに男女差などを検討すると、新たな法則性を見出せる可能性がある。

男女差も事故統計では顕著に現れやすい。しかし、男女差が出ると、その理由については安易な説明や偏見ともとれるような理屈づけがなされることが多い。男と女の違いには

誰でも一家言あるだろうが、今号からのシリーズでは高齢期の交通事故の男女差を切り口に、データの見方、読み方、考え方をより深める試みをしていくつもりである。

**歩行中事故の男女差
 死者と負傷者**

手始めに、歩行者事故をとりあげよう。歩行中に交通事故に遭って亡くなった、または怪我をした人の発生率の男女差をみてみよう。

図1は人口10万人当たりの歩行中死者数を、年齢を区切り、その年齢の中で男女別にまとめたグラフである。図2は同じく人口10万人当たりの歩行中の負傷者数である。図1も図2も平成十八年のものである。人口当たりの死者と負傷者のデータは、交通事故総合分析センター(ITARDA)から毎年刊行される「交通統計」に記されている。

死者と負傷者の二種類を見比べるのは面倒だが、両者は分けて考えるべきである。

死者数は事故発生から二十四時間以内に死亡した人の人数である。二十四時間を過ぎてから亡くなった場合は、統計では負傷者に数えられる。

人口10万人当たり負傷者数(人)

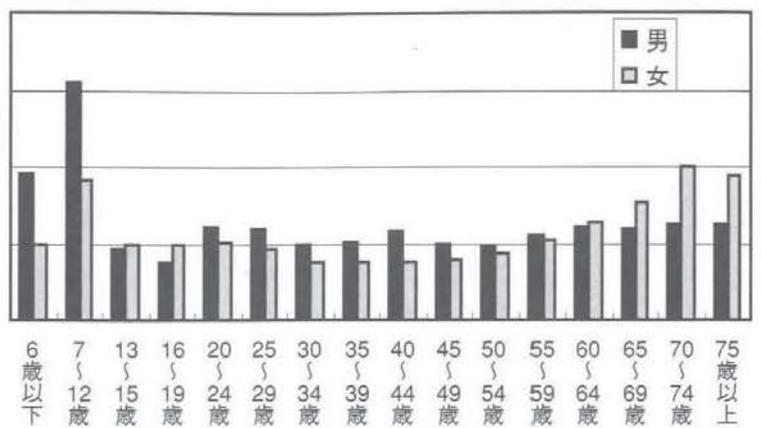


図2. 人口10万人当たりの歩行中負傷者の発生率(平成18年)
[交通統計 平成18年版] 交通事故総合分析センター(ITARDA)

子供の頃は
男の子のほうが
ケガしやすかったわね。
それが……



そうした事情からも、負傷者の延長に死者があり、死者と負傷者は結果の違いにすぎず、事故をもたらした原因は同根であるゆえに、事故原因を考察するには、死者も負傷者もひとくくりにしてはどうか、とも思うところである。両者をあわせた言い方が「死傷者」である。

ところが、わが国の交通統計には奇妙な現象がある。平成五年以降十六年まで、死者は減少するが、負傷者は増加するという増減が反対の方向を示してきた。この間は、少なくとも負傷の延長に死亡があるとはいえない。

死者と負傷者の区別とともに、区別すべき指標に事故件数と死亡事故件数がある。事故件数は死亡事故を含む件数である。したがって、事故件数は死者と負傷者の両方を含む死亡者数に概念は近い。事故件数と死

亡事故件数も、平成五年から十六年の間は、事故件数は増加する反面死亡事故件数は減少するという増減相反する傾向を示す。

わが国の交通統計史上初めての、そして世界的にも珍しい相反傾向を自動車の安全性の向上や救急医療の進歩からは説明できないことは、拙著『事故と心理』(中公新書)第7章で論じた。当面は死者と負傷者、事故と死亡事故の二本立てでみていくのが賢明である。それに相反する矛盾した傾向こそわれらの好むところであった。

さて、歩行中事故である。年齢に注目すると、高齢者に死者が多く(図1)、負傷者には子供が多い(図2)とわかる。高齢者の被害を訴えたい人は死者の統計を、子供の被害を主張したい人は負傷者または死傷者の統計を利用すればよい、とわる知恵が働いてしまう。図1と図2の縦軸の数値を読むと負傷者の数の方が圧倒的に多いから、「死傷者」というデータはほとんど負傷者のデータとなることがわかるだろう。死者と負傷者を合算して「死傷者」という指標で論じられる統計にはそこを注意しないといけない。

元気が事故に遭う?

年齢差には死者と負傷者の違いはあるが、男女差をみると、死者と負傷者の両方に共通する傾向がある。子供の頃は男子が女子よりも死亡および負傷する率が高く、それが高齢化するると女性のほうが被害に遭う率が男性より高くなる。平成十八年に限らない二十年以上も続く傾向である。男女逆転の開始年齢は死者と負傷者でずれるし、年度によっても異なる。しかし、子供と高齢者の男女逆転は高い規則性がある。その背後に何があるのだろうか。

ひとつの解釈としてつぎのようなものがある。幼少の頃は男子が活動的で元気だから事故に遭う。高齢期は女性のほうが長生きで元気で、活動的だ。元気だから歩行者事故の確率が高い、との解釈である。一見、通りそうな論だがそうだろうか。その辺の推理の落とし穴を探っていこう。

(よしだ・しんや)

文献
1. G・W・オルポート「人格心理学」誠信書房(一九六八年)
2. 「交通統計 平成18年版」交通事故総合分析センター(ITARDA)